PROGRAM NOTES

中村 孝義
（大阪音楽大学名誉教授・音楽学）

我が国にとって記念すべきオリンピック・イヤー、音楽愛好家が待ちに待っていたベートーヴェン生誕250年を記念するベートーヴェン・イヤーになるはずだった2020年が明けた時、世界が現在のような厳しい状況に陥っているとは誰が予想しただろう。新型コロナウィルスの流行は未だ衰えを知らず、全世界の感染者は今や2200万人近くに及び、死者はすでに77万人を超える（8月18日現在）。ここ兵庫芸文でも、2月から7月のほとんどの演奏会が中止あるいは延期の憂き目を見、しかも未だにこの災禍の終息が全く見えないだけに本当につらい。しかし嘆いているだけでは何も始まらない。兵庫芸文でも7月になってからは徐々に様々な試みがなされてきたが、今回の演奏会は、ベートーヴェン・イヤーを記念する演奏会のスタートに当たるもの。まだ通常のような形では実施できないにしても、芸術監督 佐渡裕が率いるPACが演奏するベートーヴェンの交響曲第1番と第3番を通じて、改めて生の音楽の掛け替えのなさ、意義深さ、そしてもちろんベートーヴェンの音楽の素晴らしさが感じられたらと思う。

ベートーヴェン：交響曲 第1番 ハ長調 op.21

Ludwig van Beethoven: Symphony No.1 in C major, op.21

ベートーヴェンの9曲の交響曲は、彼以後の作曲家たちにとって大きな規範であり続けてきたことは歴史が示す事実だが、実は彼は、当時の作曲家としては珍しく交響曲の作曲には慎重だった。彼が第1番の交響曲を公にしたのは1800年、ボンからウィーンに出て8年もが経過した30歳の時だった。その時彼はすでに12曲ものピアノ・ソナタを生み出す

など新進の作曲家として名を知られるようになっていた。ただ当時、作曲家として本格的に認められるために世に問うことが求められた交響曲と弦楽四重奏曲については、1800年まで全く公にしていなかった。彼はこれらのジャンルについては、同時代の他の多くの作曲家とは異なり、相当な覚悟を持って臨まねばならないことを明確に自覚していたのだ。

それ故この交響曲第1番は、初期の習作風の作品などでは決してなく、作曲技術的にも音楽的充実度の点でもきわめて注目に値する、個性を豊かに備えた完成度の高い作品となっている。第1楽章が序奏を持つアレグロ楽章、第2楽章が高雅な抒情性に満ちた緩徐楽章、第3楽章はメヌエット、第4楽章が序奏（徐々に形成される上昇音階だけによる主部への導入が何とも鮮やか）を持つアレグロ楽章というように、楽章構成としてはハイドンやモーツァルトのものとそう変わるわけではない。しかしよく見ると実に綿密で斬新な工夫が施されている。メヌエットを除く3つの楽章で、非常に充実したソナタ形式が展開されている点にも意欲が窺われるが、特に第1楽章序奏部を見てみると、ベートーヴェンという作曲家が、いかに通り一遍の作曲家ではなかったかが明らかになる。

調を持つ音楽は、曲が始まってできるだけ早い時期に主調を示すことが普通である。ところが彼はこのハ長調の曲を、ヘ長調の属七和音で始め、次の小節ではイ短調に進み、さらにト長調を経過した上でやっとハ長調に至るという風に、実に凝った工夫を施している。聴く人に主調は一体何？と期待をより高めさせる工夫だと思われるが、やはり一筋縄ではない作曲家だったということを示している。また第3楽章も、メヌエットと表記されてはいるが明らかにスケルツォ的なものが意図されているし、様々な点で、古い革袋に新しい酒を盛ろうとしていたことが分かる。そうした工夫や清新の意気がどのように音として実現されているかを聴き取るのが、この曲の面白さを味わうポイントといえるだろう。

楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2 ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

ベートーヴェン：交響曲 第3番 変ホ長調 op.55「英雄」

Ludwig van Beethoven: Symphony No.3 in E flat major, op.55, "Eroica"

交響曲の歴史において大きな転換点となった作品といえば、まず挙げねばならないのがベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」である。「英雄」交響曲の登場は、交響曲はおろか、これまでの音楽そのものの在り方を大きく塗り替えるほどの衝撃的な出来事となった。この作品が1805年に世に登場したとき、ベートーヴェンの新しい発想は容易には聴衆に理解されなかった。例えば「この作品ではどぎつさや奇抜さがあまりにもしばしば見られ、そのことによって見通しが極めて難しくなり、統一がほとんど全く失われている」とか「この曲の際限のない長さは、専門家でさえ疲れさせ、単なる愛好家には耐えがたいものである」などという評は、当時の聴衆のこの曲に対する戸惑いを端的に表している。

要するにその長大さや展開部の提示部を超えるほどの大きさ、それまでの交響曲に見られた趣味のよさや耳に対する快さを犠牲にするような不協和な響き（例えば第1楽章再現部に入る前で、両ヴァイオリンの弾く未解決の属七和音とホルンの奏する主和音が同時に鳴り響く所）に、当時の人は耳を覆わんばかりに驚いたのだ。しかしこうした音楽作りは、ベートーヴェンが音楽を通して言いたいことを語るために真剣に考えた結果生まれ来たものであって、この交響曲をもって彼は、思い切って古い衣装を脱ぎ捨て、聴衆が真剣に作品と向き合わねばならないシリアスな音楽世界へと飛躍しようとしたのだった。

ところでこの作品がナポレオンに捧げられるべく構想されたと伝えられていることは有名だが、だからといってこの作品にナポレオンをイメージすることは全く不必要である。ナポレオンは、ベートーヴェンに音楽における革命的な語法へと導く重要なきっかけを与えたかもしれないが、ナポレオンその人がこの作品で描写的に描かれていたわけではなかったからだ。むしろ

ベートーヴェンがイメージしていた「英雄性」は、作品のなかにまさに「革命的語法」として見事に昇華され表現されている。第1楽章は、まさに革命的なソナタ形式による、長大で充実した楽章。第2楽章は荘重な葬送行進曲。第3楽章はベートーヴェンの最初の本格的といっても良いスケルツォ。フィナーレは、俗に「プロメテウス主題」と呼ばれる主題を性格的に変奏する変奏曲の形式で書かれている。19世紀、20世紀と様々な音楽や斬新な響きを経験してきた我々の耳が、この曲の革命性を耳で感じるのは、実は容易ではないが、こうした作品であったことに思いを馳せながら聴いて頂くのも一興かと思う。

楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2 ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

※この公演の録音・録画・撮影および、そのための機材の会場内への持ち込みは固く禁じられています。
※音や警報音の鳴る機器（補聴器、アラーム付時計等）をお持ちの方は、上演中音が鳴らないようご注意願います。
※客席内では携帯電話は使用できませんので、電源をお切りください。
※演奏中の会話、客席内でのご飲食はご遠慮ください。

新型コロナウイルス感染防止に関するお願いとお知らせ

●必ず指定されたお席でご鑑賞ください。●ご鑑賞中も、常にマスクをご着用ください。●ブラボーなどの声援や、大きな声での会話はお控えください。●開演中に退出されますと、ご自身のお席へお戻りいただけない場合があります。●終演時は、分散してのご退場にご協力ください。●客席内は、強制換気システムにより常に外気との入れ替えを行っております。

当センターウェブサイトより、アンケートへのご協力をお願いいたします。

右記QRコードを読み取って公演カレンダーへアクセスしてください。
（各公演翌日から10月13日まで）

「兵庫県コロナ追跡システム」をぜひご利用ください。館内掲示のポスターよりQRコードを読み取ってご登録ください。